



Book Review 大衆に奉じた出版人、格差批判としてのアジア主義の射程[下中彌三郎 : アジア主義から世界連邦運動へ 中島岳志・著, アジア主義 : その先の近代へ 中島岳志・著]

梶谷, 懐

(Citation)

外交, 31:146-149

(Issue Date)

2015-05

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003910>



【選評】

神戸大学大学院教授

梶谷 懐

大衆に奉じた出版人、 格差批判としての アジア主義の射程



下中彌三郎

—アジア主義から世界連邦運動へ

中島岳志・著

平凡社／2015年／3000円＋税

二〇一五年三月、自由民主党の三原じゅん子議員が、参議院の予算委員会の質問で「八紘一字」という言葉

を使ったことが大きな話題となった。日中戦争から太平洋戦争へと続く総力戦を支えた理念でありスローガン

が、現代の国会の場で突然用いられたことに多くの人が驚き、批判が集中した。リベラルな価値観を持つ識者やネット民の反応は、「もともと歴史を勉強しろ」として揶揄・冷笑するものがほとんどだった。

「八紘一字」発言の背景

しかしながら、もう少し問題を深刻に受け止めるべきだと言う反応を示した識者も少数ながら存在した。近代日本におけるアジア主義の問題を思想的に掘り下げる著作を数多く発表している中島岳志もその一人である。彼は三原発言後、SNSを通じて次のような議論を展開し、注目を集めた。

中島は、介護やがん患者ケアに熱心だったという三原の問題意識と、企業の租税回避に憤り、グローバル資本主義を正す文脈で「八紘一字」

の理想を語る姿勢がつながっている可能性を指摘する。すなわち、三原は福祉に熱心「なのに」八紘一字に惹かれているのではなく、福祉に熱心「だからこそ」八紘一字に惹かれる、というわけである。それにしても、グローバル資本主義への批判と、戦前の超国家主義を象徴する「八紘一字」への評価がどう結びつくのか。その点を解きほぐす上で必読の書ともいえるのが、彼の近著『下中彌三郎』である。

さて、この書物で中島は、平凡社の創始者として知られる下中彌三郎という人物の生涯を通じ、戦前の日本社会において「アジア主義」が持っていた両義的な性格を浮き彫りにしている。

下中は、早く父親を亡くしたため小学校を中退して働きながら独学で教員になり、貧しい庶民が誰でも教養を身につけられるようにと大衆向けの出版事業を始めた。生涯にわたって資本主

義がもたらす不平等に憤り、相互扶助を基本理念とするコミューン的な社会の実現を追求した。戦前にはブルジョア階級の打倒を叫ぶ一方で、天皇による世界の統一を主張する。それこそ、「八紘一字」というスローガンに二も三もなく心酔した人物だったわけだ。そして、戦後は一転して新憲法、特に第九条を絶賛して絶対平和主義を訴え、世界連邦運動をけん引する。

現代に生きるわれわれの感覚からすると、下中は「右」と「左」の間でその主張が極端に揺れ動く、節操のない人物のように思える。しかし、その下中の思想は、天皇を中心に抱くユートピア主義ということで実は首尾一貫している、と中島は主張する。すなわち、「彼にとつて天皇は変革のシンボルであり、平等の根拠である。一君万民という国体こそ、階級を打破する革命原理であり、闘争の論理である（同

書四六頁）」というわけである。

評者のような現代中国を研究している者にとつては、晩年の下中が一九五〇年代に毛沢東時代の中国を訪問し、その印象から中国を「泥棒がいない、遊び女がいない、働きさえすれば誰でも飯が食える」「地上の楽園」だと絶賛し、そこに自分にとつての「理想郷」を見出す、という描写が非常に印象的だった。「人民の意志」を体现した賢明な指導者に従うことで富の偏りがなく平等な社会が実現する、という考えは、中国の伝統的な思想に起源をもち、さらには毛沢東を理想的な指導者と仰ぐ社会主義中国にも受け継がれる考え方である。評者の眼には、下中の戦前・戦後を貫くユートピア主義と、現在の中国社会においてなお毛沢東を熱烈に支持する、下層民衆の心情とがほぼ重なりあうものとして映った。下中にとつて、戦前の「八紘一字」

の理想と、戦後の社会主義中国を地上の楽園と絶賛する姿勢はストリートにつながっていたとみるべきである。このような複雑な人物への関心が、上述の三原発言を重く受け止めるという中島の姿勢につながっているように思われる。

西洋近代化の普遍性に対抗？

中島はこれまでも、日本の近代化においてアジア主義がもたらした可能性と問題点を、日本とアジアに

おける人物交流史を丹念に踏まえて評価する作業を行ってきた。評者も、現代の日本と中国に関する問題を考えるにあたって、そういった中島の一連の仕事から大いに啓発を受けてきた。

ただ、同時に評者は彼の姿勢に若干の違和感も覚えている。一つは、彼が近代合理主義を内在的に乗り越

えようとするのではなく、代わりに自分たちの伝統の中にある概念を持ち出して西洋近代の普遍性に対抗する、という立場にコミットしているように思える点である。例えば、彼は二〇一四年に出版された『アジア主義』という著作の中で、竹内好の「方法としてのアジア」という概念を批判し、西洋近代の普遍性に代わって打ち出すべきアジア自身の価値観として「多一論」を掲げている。

中島はこの「多一論」について、ある場合には「相對主義によって構成されるリベリズムの限界を突破し、真の多元主義的寛容を生み出す」ための概念といい、またあるときは「リベリズムを包み直し」、「アジアによる価値の巻き返しによって普遍性を構築する」ものとしてそれを称揚する。

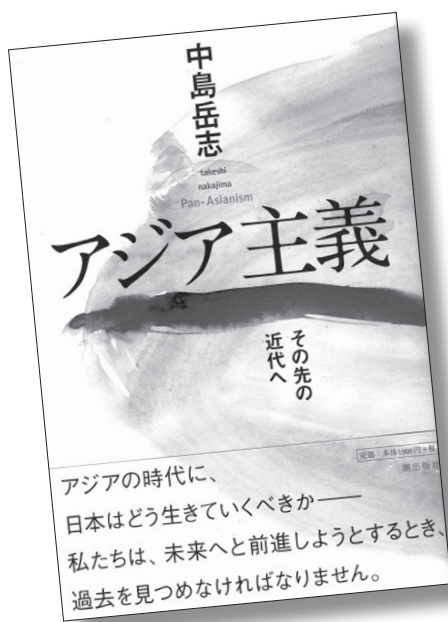
しかし、このような多一論とは、

結局のところ「基本的人権」や「言論の自由」「民主主義」といった概念が憲法などの成文法を通じて実体化されているように、実体化されることがありうるのだろうか。あるいは、「人権」や「自由」など普遍的価値をアジア独自の「多一論」と融合させればよいのだろうか。しかしそれは、西洋由来の普遍的価値を、より大規模に実現するために「方法としてのアジア」を唱える、という竹内の思想とどこが違うのだろうか。

中島の一連の著作について、もう一つ指摘しておきたいのは、彼が戦前のアジア主義に関わる一連の議論を、もっぱら現代日本社会の閉塞感、とくに若者の「生きがたさ」に結びつけようとしている点である。しかし、戦前の場合がまさしくそうだったように、実際にはこういったアジア主義的な言説は、近隣アジア、な

かんづく中国大陆の状況と密接に關係している。社会全体を閉塞感が覆っていた一九三〇年代、それを打破するために唱えられた「八紘一字」や「東亜協同体」などの概念が、アジアへの侵略戦争を正当化するスローガンとなっていたことはいまさら言うまでもない。

この点を踏まえるなら、中国を初めとした近隣アジア諸地域において、グローバル資本主義に象徴される近代合理主義の導入およびそのひずみの克服が、どのように切実な課題として受け止められているのか、その点への配慮なしに議論を進めることは、かなり「危うい」ことだと思われる。



アジア主義

—その先の近代へ

中島岳志・著

潮出版社／2014年／定価 1900円＋税

近年の日中関係は、領土問題などをきっかけに中国の民衆がしばしば激しいナショナリズムを爆発させ、それが日本における広範な嫌中意識の高まりをもたらすということを繰り返してきた。これも見方を変えれば、グローバル資本主義がもたらすひずみが、両国においてその反作用ともいうべき反応をもたらし、相互に影響を与えながら混乱を増幅させた結果として理解できるかもしれない。その状況を正しく認識しないまま、グローバル化の一層の推進を唱えることも、逆に反グローバルリズムを唱えることも、どちらも望ましい結果をもたらさないと評者は考えている。ここで紹介した中島の一連の著作は、こういった閉塞状況から抜け出るためにどう考えればよいのか、そのためのヒントを数多く提供してくれるだろう。●